



死生学における質的研究の展開と意義

——死の心理学研究を中心に

Development and Implications of Qualitative Research in Death Studies: Focusing on the Psychology of Death

川島大輔 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

Daisuke Kawashima National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry

キーワード：死生学, 質的研究, 死の心理学, ナラティブ

Key words: death studies, qualitative research, psychology of death, narrative

はじめに

本稿は、死生学における質的研究の展開と意義について、とくに死の心理学研究を中心に論じるものである。はじめに死生学という学問領域について触れ、死の心理学の概要および質的研究の位置づけを確認する。次に、死の心理学における質的研究の展開について、その初期から現在までの研究を事例的に取り上げつつ概観する。最後に、ナラティブの視点から、死の心理学における質的研究の意義と今後の課題を確認する。

死への多様なアプローチと死生学

死の問題に対して、これまで哲学、宗教学、医学、歴史学、社会学、看護学、そして心理学など、実に様々な学問分野から多様かつ分厚い研究が行われてきた。とくに死生学 (Thanatology) という、死を扱う学際的な研究分野において、複数領域からの知見が集積されてきている (Balk, 2007)。そもそも Thanatology という語句そのものは死についての学問を意味することから死学と訳すこともできるのだが、カステンバウム (R. Kastenbaum) が述べるように、「死生学とは、通常死

についての研究分野と定義されるが、より正確には(いくぶん文法上は不適切かもしれないが)死を含んだ生についての研究分野」(Kastenbaum, 2001, p.1015)である。

死生学において展開されている研究は、たとえば、死亡率と関連する因子の特定を行う疫学研究、死因や解剖、死亡時期の判定を行う法医学研究、墓や葬送儀礼の形態・変遷を解明する人類学研究、悲嘆や死にゆく患者へのケアとその周辺領域に迫る心理学・精神医学研究など、多岐にわたっている。日本および東アジアで形成されてきた「死生学」の概念は、欧米が専ら研究の対象としてきた死とその周辺において生起する諸問題より、広い領域を指し示すとの指摘もある(島菌, 2008)。このように、この学問分野が扱う領域が多様かつ複雑であること、そして死と生の関係についてのものの見方が欧米と日本で、必ずしも一致していないという事態が、死生学の輪郭を描きにくくしている。

そこで本稿では死生学をひとまず「死と生を扱う学問分野」と緩やかに位置づけ、とくに欧米においても、また日本においても、死生学の中核に位置する(島菌, 2008)、死に臨む人や死別の悲しみに直面している人へのケアとその周辺に関する死生学 (Death Studies) に焦点化する¹⁾。なおこの狭義の死生学においては心理学、精神医学、看護学、社会学からの研究が蓄積されてきているが、本稿では、とくに死の心理学 (Psychology

of death) を中心として議論を展開する。

死の心理学の展開と質的研究

1 死の心理学とは

死の心理学という言葉は、死の心理社会的側面にアプローチする一領域として、死生学研究を牽引している心理学者によってしばしば用いられ (e.g., Kastenbaum, 2002/1992; Neimeyer & Werth, 2005), この領域の開拓者としては、『Meaning of death (邦題 死の意味するもの)』を著したファイフェル (Feifel, 1973/1959) の功績が讃えられる (Kastenbaum & Costa, 1977)。

死の心理学における古典としては、フロイト (Freud, 1969/1915, 1970/1917, 1970/1920) が挙げられる。また心理学の黎明期には、ジェイムズ (James, 1969-1970/1902) が不死性 (immortality) について、ホール (Hall, 1915) が死恐怖症 (thanatophobia) と不死性の問題について考察している。しかし心理学者が死をその主題として積極的に扱うようになったのは、第二次世界大戦後の荒廃の中、人間の価値を再考しようとする、死を巡る大きな社会的動向となった「死を知ろう運動」(Death Awareness Movement) が興った1950年代半ば頃からである (Kastenbaum & Costa, 1977)。前述のファイフェル (1973/1959) による記念碑的著書もこの時期に刊行され、その後、社会的な関心を集めたキューブラー・ロス (Kubler-Ross, 1998/1969) による『On death and dying (邦題 死ぬ瞬間)』の出版や、ホスピス運動の高まりに後押しされ、多くの研究が蓄積されてきている。

死の心理学研究は、死への態度、死にゆく過程、死別による悲嘆を中心的なテーマとしている。死への態度に関する研究では、死の概念や死の不安といった、死に対する多様な態度について研究知見が集積されている。死にゆく過程に関する研究では、死にゆく個人の心理プロセスの同定や予期悲嘆、および個人を取り巻く社会文化的文脈からの影響が検討されており、最近では安楽死や「すみやかな死」(hastening death) とい

った人生の終焉における様々な心理社会的な側面についても研究がすすめられている。死別による悲嘆に関する研究では、愛する者との死別による悲嘆反応の特徴とその関連要因、また時間的経過に伴う変化が検討されており、病的な悲嘆への介入研究も多数報告されてきている。この他、近年では、自殺についての心理学研究も社会的情勢の変化から多くの注目を集めている。ターミナル・ケアや死への準備教育といった、より臨床的なテーマについての研究も報告されてきているが、他のテーマと比較して研究蓄積は乏しい。

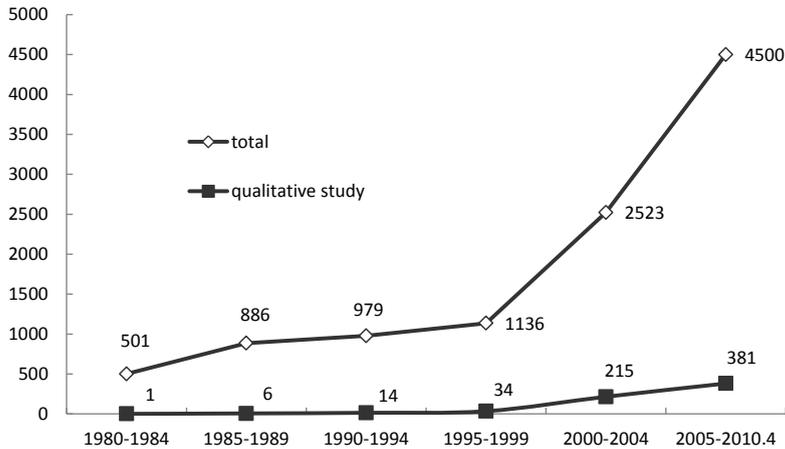
2 死の心理学における質的研究の位置づけ

心理学者の情熱は、長年、死の不安や悲嘆の程度を把握する尺度の開発とその適用に、専ら注がれてきた。そのため、たとえば死への態度研究においては、95年までの20年間に刊行された文献の95%以上が、直接的に死への態度を問う質問紙法によるものであった (Neimeyer & Van Brunt, 1995)。

しかし最近になって、これまでの量的研究が揃えていなかった側面、たとえば死に対する意味づけの個別性、社会文化との関わり、死に直面した個人や遺されたものの心理に対する多様な理解、の重大さを多くの研究者が指摘するようになり (Neimeyer, 1997-1998; Neimeyer & Hogan, 2001; Neimeyer, Moser, & Wittkowski, 2003; Silverman & Klass, 1996)、質的研究に対する期待が高まってきている (Carverhill, 2002; Owens & Payne, 1999; Thorson, 1996)。この分野の著名な学術雑誌である『Death Studies』の26巻3号において質的研究の特集が組まれたことも、関心の高さを反映しているといえる。

質的研究への関心の高まりとともに、事例の分厚い記述、綿密なインタビュー調査、そして長期にわたる観察等による、死の心理学の先駆的研究の再評価が行われている (Thorson, 1996)。死の心理学における先駆的研究は、多様なソースから有益な情報を収集している点、各事例を丁寧に記述している点、そして何より後世に影響を及ぼした仮説 (あるいはモデル) を生成している点において、質的研究の目指すものと多くの接点を有する。ただし、死の心理学における現在の質

表 1 死の心理学における質的研究報告数の推移¹⁾



注 1) 検索数は 2010 年 4 月 20 日のもの。

的研究はそのような背景を有しながらも、言語論的転回や物語的転回といったものの方見方に関する革命や、解釈的相互作用論やポスト構造主義といった人文・社会科学分野における近年の発展の影響を多分に受けている。具体的文脈に状況づけられた理論を導き出そうとする現今の質的研究は、普遍的な標準的モデルを想定した多くの古典的、先駆的研究とは大きく異なる。

さらに質的研究の有用性を訴えることに留まらず、先駆的研究に対する批判の中心となっていた、方法論や研究手続きの不明瞭さという問題の解決に向けた議論、たとえば質的研究の意義と量的研究との関連性 (Neimeyer, 1997-98; Neimeyer & Hogan, 2001; Owens & Payne, 1999; Stroebe, Stroebe, & Schut, 2003) や、具体的研究方法 (Devers & Robinson, 2002; Gilbert, 2002; 川島, 2007; Wright & Flemons, 2002) についての議論が展開されるようになってきた。しかしながら論文の報告数でみると、死の心理学における質的研究は、いまだ十分な研究蓄積がなされているとはいえない。PsychINFO を用いて「Death and Dying」を Index term に設定し、学術論文を検索したところ、質的研究は少しずつ報告数を伸ばしてきてはいるが、いまだ全体の 1 割にも満たず、量的研究によるものが圧倒的多数を占めているのが現状である。

次項では、死の心理学の初期から現在に至るまでの質的研究の展開を、とくに死への態度、死にゆく過程、

死別による悲嘆、そして自殺のテーマについて、いくつかの研究事例を取り上げながら概観する。

死の心理学における質的研究の展開

1 死への態度

死への態度に関する先駆的研究として位置づけられるものに、ナギイ (Nagy, 1973/1948) が挙げられる。彼女は 3 歳から 10 歳までの子ども 378 人に対して調査を行い、子どもの死の概念を 3 つの発達段階に区分している。つまり 5 歳ごろまでは死が終わりであるとは理解できず、死はまったく別の環境に移り、遠い存在になる出発と考える。5 歳から 9 歳までは死というものの存在を理解することはできても、たとえば賢い人間や運の良い人間は死を免れることができるとする、死の擬人化を行うようになる。そして 9 歳から 10 歳ごろには、子どもはすべての人間に生じるものとして死を理解できるようになるという。この段階説は大いに着目され、その後も様々な形で検証され、また十分に支持されてきた (Kastenbaum, 2002/1992)。近年では、たとえばヤンとチェン (Yang & Chen, 2002) が、6 歳から 16 歳までの子ども 239 名に死の印象について絵を描かせ、その内容を質的に分析している。結果、

年少の子どもの方がより物理的な死を描いていたのに対して、年長の子どもでは抽象的なイメージが顕著であったと報告している。

またナギイ (1973/1948) の研究では、死について心に浮かんだ事を書く作文、死についての絵、それらをもとにした子どもとの話し合いが主要なデータ収集方法として用いられており、その手法は質的研究において重視されるトライアングレーション (Flick, 2002/1995; Willig, 2003/2001) とも通じるものである。

死への態度が年齢段階的に発達するのではなく、他者との関係性や社会文化に流布している物語との関わりの中で構成されるとして、その有り様に迫った研究も報告されている。川島 (2008a) は宗教や文化が提供する大きな物語、とくに生死やいのちについての「聖なる物語」に着目し、「文化の物語を原典にして、それを引用しながら、私ヴァージョンに語りなおす作業」(やまだ, 2006a, pp.46) に迫っている。また川島 (2008a) は、家族との死別体験と自己の死の意味づけの結びつきを強調しているが、これはその重要性が認識されながら、これまで十分に考慮されてこなかった、死への態度と死別後の悲嘆の連関 (Neimeyer, 1994) を描出するものである。

こうした研究報告がある一方で、死への態度に関する質的研究は、尺度開発のための予備的研究として位置づけられることも多く (Neimeyer, 1997-1998)、十分な研究蓄積がなされていない。

2 死にゆく過程

死にゆく過程に関する先駆的研究として挙げられるはキューブラー・ロス (1998/1969)、そしてグレイザーとストラウス (Glaser & Strauss, 1988/1965) による研究である。

キューブラー・ロス (1998/1969) は、死にゆく過程には様々な段階があることをはじめて研究によって明らかにしたといわれる (Kastenbaum, 2000; Samarel, 1995)。彼女はシカゴ神学校の学生4人とともに学際セミナー「死とその過程」を開催し、そこに招いた200名以上の末期患者に対するインタビューと観察を通じて、有名な死の5段階説を提唱した。つまり死に

ゆく人は、不治の病であるという事実を認めようとせず、その否認を維持しようとする「否認と孤立」、自分以外の人間や神に怒りを覚える「怒り」、善行によって何とか避けられない結果を先に延ばそうとする「取り引き」、手術や症状の悪化などによる反動的な抑うつと、この世との永遠の別れのための準備的な抑うつが見られる「抑うつ」、そして「受容」という段階を辿るという。彼女が、死を前にした人間の尊厳の回復という形で、医療現場での非人間的な末期患者への扱いを改善する契機を作った功績は計り知れない。またそれまでタブーとされてきた死にゆく過程への研究の扉を開いたという点においてもその貢献は大きい。この段階説はその明快さから一般に広く受け入れられ、現在でもキューブラー・ロスの段階説と類似した、受容に至るプロセスが報告されている (小久保, 2006; 渡邊・岡本, 2003)。一方で、この段階説は根拠が乏しく、臨床現場で確認される患者の様子と隔たりがあるとして多くの議論を呼び起こしている (e.g., Shneidman, 1980/1973)。

こうした段階説から緩やかに離れ、新しい視座を提供しているのが、近藤・家田・近藤・本田 (2010) である。キューブラー・ロス (1998/1969) の研究を再吟味した上で、死にゆく患者の死への態度ではなく、その生の質 (Quality of life) を患者本人と遺されるもの双方の視点から描出しようとしている。またそこで用いられる関与・観察的対話は、鯨岡 (2005) が提唱している「関与・観察」の一部として位置づけられており (近藤, 2010)、その最大の特徴は協力者と研究者の出会いを強調し、研究者の主観を積極的に研究に組み込むことで、末期がん患者が生きる世界の内実を生き生きと描き出そうとしている点にある。

一方、グレイザーとストラウス (1988/1965) は、サンフランシスコ周辺の6つの病院における、終末期患者およびスタッフへのインタビューと観察から「死のアウェアネス理論」を提唱した。とくに相互作用に関与する一人一人が患者の医学的病状判定について何を知っているか、そして患者が知っていることを他の人々はどこまで知っているか、患者自身思っているのかを意味する認識文脈 (awareness context) という概念は、死にゆく過程の社会的文脈の理解にもっとも大

きな影響を与えたものだとされている (Kastenbaum, 1989)。また一連の研究を通じて提唱されたグラウンデッド・セオリー (Glaser & Strauss, 1996/1967) は、今日の質的研究の主要な方法論となっている。国内では、庄村 (2008) が、死にゆくがん患者と家族との相互作用に着目した質的研究を行い、「互いの気遣いによる支え合い」を核として、7つのテーマと、6つの影響要因を見出している。とくに「互いに真実に触れないことによる安定の保持」というテーマは、グレイザーらが指摘した「相互虚偽」の認識とは異なる相互作用であり、夫婦や親子といった親密な関係において語らず、察するということの意義を提示している。

この他、近年では、人生の終焉に直面する様々な問題 (end-of-life issues)、つまり安楽死や臓器移植等に関する問題が研究の対象となってきているが (e.g., Leichtenritt & Rettig, 1999, 2002)、国内での研究蓄積は乏しい。

3 死別による悲嘆

死別による悲嘆に関する古典としてしばしば言及されるのが、フロイト (Freud, 1970/1917) による『悲哀とメランコリー』である。そこでの見解、すなわち喪った対象に注ぐ感情のエネルギーを徐々に減少させ、次第に新たな関係にエネルギーを投じるようになるという、悲哀の標準的モデルは、以後の悲嘆理論の試金石とみなされてきた (Hagman, 1995)。またパークス (C. M. Parkes) は、配偶者との死別後にみられる悲嘆プロセスや社会的状況の変化について検討したハーバード死別問題研究での研究成果 (Parkes & Weiss, 1987/1983) など、一連の死別研究をもとに、「心の麻痺」が「切望」に置き換わり、「絶望と混乱」を経て「回復」にいたるモデルを呈示している (Parkes, 2002/1996)。既述のキューブラー・ロスによる5段階説も、死別による悲嘆プロセスの段階説として採用されるようになり、以降の研究者の関心はこうした標準的な段階の検証に向けられていた。

しかし近年、上記のような標準的モデルは厳しい批判に晒されるようになる。たとえばストロエブラ (Stroebe, Stroebe, Gergen, & Gergen, 1992) は、社会構

成主義の立場から、標準的モデルに内包されている「絆の切断仮説」(breaking bonds hypothesis) そのものが、近代以前の遺物に他ならないと指摘している。このような批判を受けて、多くの新たなモデルが呈示されてきており、質的研究やセラピー場面における個性記述的な報告から提案されているものも少なくない (e.g., Klass, Silverman, & Nickman, 1996; Neimeyer, 2001a; Walter, 1996)。こうした「ニュー・ウェーブ」理論 (Neimeyer, 2006/2002) は、適応パターンの複雑性の重視、故人との象徴的な絆の維持、認知的過程の重要視、死別による悲嘆が当事者の自己認識にもたらす影響、トラウマ体験後の成長、個人的な体験と家族や周囲のグループとの社会的相互的体験としての悲嘆、を共通要素としている。

国内でも渡邊・岡本 (2006) が、身近な他者との死別を契機として、自己の洞察を深めるという「死別経験による人格的発達」について検討している。戈木 (1999) は、小児がんによって子どもを亡くした母親を対象とした質的研究を実施し、母親たちの語りには「以前より強くなった」「価値観が変わった」「死が怖くなくなった」の3つの変化が表れていたと述べている。こうした着眼は新しいモデルの要素の一つである、トラウマ後の成長 (post-traumatic growth: Tedeschi, Park, & Calhoun, 1998) の概念とも共通するものである。

また近年、故人と遺されたものを象徴的につなぐ「継続する絆」(continuing bonds: Klass et al., 1996) の概念が注目を集めているが、国内においても鷹田 (2006) や戈木 (1999) が、故人との絆について検討している。この継続する絆の概念は、自助グループでのエスノグラフィや、日本、東アジアの死生観についての質的研究をもとに、それまでの故人との関係性を絶つことを重視した悲嘆の標準的モデルに対する痛烈な批判とともに提案されたものである (Klass et al., 1996)。死別による悲嘆研究では、こうした質的研究を通じた新しいものの見方への転換が顕著に見られる。

4 自殺

アメリカにおける自殺研究の第一人者である、シュナイドマン (E. S. Shneidman) は自殺で亡くなった

人の遺書についての詳細な分析を行い、その心理的背景を明らかにしようとしてきた (Farberow & Shneidman, 1969/1961; Shneidman, 1983/1980)。またシュナイドマンが提案した心理学的剖検 (psychological autopsy) という手法は、配偶者やきょうだい、恋人など、複数の遺された人々に対する綿密な聞き取り調査を行い、死因を特定すること、動機や哲学などの自殺に至った背景、そしてどのようにして、いつ亡くなったのかという過程を明らかにするものであり (Shneidman, 2005/1993)、今日の自殺研究において欠くことのできない研究方法である。この手法によって得られた情報は専ら量的な分析によって検討されるが、質的な検討も行われており、たとえば勝又らは、心理学的剖検の手法を用いて収集した 28 名の自殺事例の情報をもとに、背景要因と自殺に至るプロセスについて分析している (勝又・松本・高橋・渡邊・川上・竹島, 2008)。

こうした手法は様々に語られる故人の物語を紡ぎ合わせることで、その原因と自殺に至る過程を解明しようとするが、それは同時に、語り手によって異なる、複数の真実があることを浮き彫りにする。そのことを最も明確に描出したのが、シュナイドマン (2005/2004) による『Autopsy of a suicidal mind (邦題 アーサーはなぜ自殺したのか)』である。これはある自殺事例に対して羅生門的にアプローチしたもの、つまり遺書および遺された人々から聞き取った内容をもとに、複数の専門家が分析を行ったものであり、まさに「死を巡る複数の真実や多様な理解の仕方をもたらす質的研究」(Carverhill, 2002) といえよう。

また自殺に対する心理学研究において、新しい視点を提示しているのが、認知言語学の視点から、死や自殺に対して人々が持っている「しろうと理論」を検討した、荘島らによる研究である (荘島・川島・川野, 2010)。荘島らは 1800 名の自由記述を用いて、死と自殺の語りにおける動詞に着目した分析を行った。結果、動詞の使われ方が死と自殺で異なること、とくに死は、旅路メタファおよび隣人到来メタファで語られ、自殺は事故メタファおよび因果論のストーリー (自殺者は意志をもって自殺を選択した、あるいは何らかの原因があって自殺に追い込まれた) で語られることを指摘した。この研究は、社会的に構成された、死や自殺をめぐる言説を把

握しようとする試みであり、今後の展開が期待できる着眼点である。

際立った先駆的研究が存在している一方で、質的研究の蓄積は非常に乏しい (Hjelmeland & Knizek, 2010)。とくに国内では量的研究、質的研究ともに研究蓄積が乏しく、今後の発展が切に望まれる。

死の心理学における質的研究の意義と課題

1 死の心理学における質的研究の意義

死の心理学において質的研究はどのような可能性を秘めているのであろうか。それはまさに質的研究が謳ってきた、リアリティーを掬い、主観性を復権させ、そして認識論を再吟味することに他ならない。とくに死別による悲嘆研究においてみてきたように、質的研究が死に対するものを見方を大きく転換させる可能性を秘めていることの意義は大きい。

また現場の実態とはかけ離れた、過度に抽象化された標準的モデルや、それを無批判に受け入れ、安易な再生産を繰り返してきた従来の研究では、人々の死生のあり様に十分迫ることができない。質的研究は、研究と現場の乖離を解決しうるものとして期待される (Jordan, 2000; Silverman, 2000) が、それは質的研究が具体的文脈に状況づけられたモデル・理論の構築を目指すからに他ならない。

以下、死の心理学において、近年とくに関心を集めているナラティブ (narrative) の視点 (川島, 2009; Klass, 2001; Neimeyer, 2001b; Thorson, 1996) から、質的研究の意義を確認する。

(1) 意味と物語

質的研究は仮定された客観的真実の追究とは対照的な、意味や一貫性を強調する (Owens & Payne, 1999)。とくに死別は自己物語を混乱や機能不全といった危機に陥れる、「意味の危機」(crisis of meaning: Neimeyer & Anderson, 2002) である。そのため「喪失に対する意味再構成は悲嘆における中心的なプロ

セス」(Neimeyer, 2006/2002)として位置づけられる。ナラティブは物語や語りと訳され、経験を組織化し意味づける「意味の行為」であり、そのため、意味はどの物語にとっても不可欠で、どの物語の把握にも関係してくる条件である(Bruner, 1999/1990)。

ナラティブというものの見方は、1990年代以降の物語的転回と呼ばれる認識論、方法論の変革以降、質的研究の中核に位置すると考えられている(やまだ, 2006b)。自己あるいは他者の死に直面することは、それまで暗黙裡に想定していた世界を揺るがし、あるいは自己と他者との亀裂といった、物語が求め語りなおされる契機(Neimeyer, 2000)となる。とくに死別体験者は、物語の途中で中心人物を失った小説のように、それ以降の章を物語の辻褃が合うように書き直すことを余儀なくされる(Neimeyer, 2006/2002)。そのため死別による悲嘆研究を中心に、物語の視点が用いられ(Klass, 2001; Neimeyer, 2001b; Walter, 1996; やまだ, 2000a)、死の心理学における質的研究の中核にも位置づけられるようになってきている(Thorson, 1996)。

(2) 多様な死と生の意味をむすぶ

意味と物語に着目することは、死と生の意味づけが、その多様性や矛盾を含んだまま物語全体の中でどのような筋に沿って語られるのかに迫り、意味づけの多様な「むすび」(やまだ, 2000b)を明らかにすることを可能にする。とくに近年国内で報告された、いくつかの質的研究(広瀬・田上, 2003; 川島, 2008a, 2008b; 近藤ら, 2010; 戈木, 1999; 鷹田, 2006)は、死と生、死者と生者をむすぶ試みであり、死と生の関連を認識しながら主として死を扱う研究(Death Studies)に焦点化していた欧米を中心としたパラダイムから、日本における「死と生の研究」(Death and Life Studies)という死生学研究の新しい展開(島藺, 2008)へのパラダイム転換を後押しするものと思われる。

(3) 関係性の中で意味に迫る

死の心理学研究では、これまで専ら死や死別の個人内プロセスに焦点が当てられていた。しかし家庭内でも死の受け止め方や悲嘆のプロセスは大きく異なるし(Nadeau, 2001)、個人の死に対する意味づけも他

者との関わりを通じて構成されるものである(川島, 2008a)。質的研究、とくにナラティブというものの見方をとれば、たとえば家族間での相互行為に着目することで(庄村, 2008)、重要な他者との対話を通じて、意味が構成される側面に迫ることができる。

またインタビューの場面において調査者は受動的な「回答の容器」ではなく、研究者と対象者は意味構築の現場にアクティブに関与している(Holstein & Gubrium, 2004/1995)。そのため研究者は自らの問いや現場での立場が研究にどのような影響を及ぼしているのかについて省察すること(川島, 2008b; 鷹田, 2003)、あるいはインタビューという場における相互行為に迫ること(近藤ら, 2010)により、意味が対話的に構成される側面を扱うことができる。

(4) 社会文化との関わりを捉える

ゴラー(Gorer, 1986/1965)は、死への態度と死別後の喪の形態が、喪に関する伝統的な儀礼や慣習といった社会背景と密接に関連していることを明確に指摘したが、死の心理学研究においてこうした側面が重視されることは少なかった。ナラティブというものの見方を導入することで、個人の物語と文化の物語との密接な関係(やまだ, 2000b)を描出することができる。

ただし、語りとは文化に流布する大きな物語をそのままに語るのではなく、それを引用しながら私ヴァージョンに語りなおす作業である(川島, 2008a; やまだ, 2000a)。あるいはまた、差別や偏見をもたらす物語や、個人の意味づけと相容れない物語に対峙する語りもあるだろう(良原, 2009)。社会に流布する言説を把握し(荘島ら, 2010)、それらと個人の物語がどのような関係性にあるのかを捉えていく研究の展開が期待される。

2 今後の課題

死の心理学研究の主流は、標準化された尺度を用いた研究であり、質的研究はその補足、あるいは尺度作成の予備的研究として位置づけられることが多い(Stroebe et al., 2003)。量的研究と質的研究は相補的關係であること(Owens & Payne, 1999)、あるいは方

法論的多元主義 (methodological pluralism: Neimeyer & Hogan, 2001) の立場が強調されるが、実際に両者の知見をどう統合的に検討していくのかという議論は乏しい。今後、積極的な議論が望まれる。

またそのためにも、現今の質的研究が、具体的な文脈に状況づけられた豊かな仮説の生成を行っていくことが必要不可欠である。死別による悲嘆研究のように、質的研究を通じて提案された新しいモデルが研究を牽引している領域もある。しかし全体としてはまだまだ不十分であり、単なるケース報告や語られた内容のカテゴリー化に止まっている研究も散見される。それらにおいて報告される内容は、すでに先駆的な死生学研究で報告されたものと大きく異なるものではなく、新しい知を提供しているとは言い難い。また、先駆的研究がその方法論的な問題について数多くの批判に晒されてきたにもかかわらず、十分な議論を行わないまま特定の分析方法を安易に選択している研究も多数見受けられる。南 (2006) が危惧したように、質的研究が、語りを収集し、その中から物語パターンを見つけ出し、分類していく、安易な料理法的な研究となる危険性も懸念される。

その一方で、先駆的研究の内容と意義は十分に考慮されているとは言い難い。とくにキューブラー・ロス (1998/1969)、パークスとワイス (1987/1983) の研究の先見性、死生学の新たな領域を開拓しようとした情熱、そして何より詳細に記述された、生き生きとした語りはほとんど省みられず、主として最終的なモデルのみが批判の対象となってきた。今後の質的研究では、先駆的な死生学研究に今一度立ち戻り、その意義を確認すること、そして先人達がそうしてきたように「アクチュアルな (現実の) 言葉、生身の言葉」(やまだ, 2000c) を丁寧に記述していくことから始めなくてはならない。

注

- 1) Thanatology と Death Studies はいずれも死生学と訳され、さほど区別なく用いられてきたが、前者は死に関するより広い範囲を対象としているのに対し、後者は専ら死に臨む人や死別の悲しみに直面している人へのケアとその周辺を対象に

しているといえる。本論文では、以下、死生学を後者の意味で用いる。

引用文献

- Balk, D. (Ed. in chief), Wogrin, C., Thornton, G., & Meagher, D. (Eds.). (2007). *Handbook of thanatology: The essential body of knowledge for the study of death, dying, and bereavement*. New York: Routledge.
- ブルーナー, J. S. (1999). 意味の復権——フォークサイコロジに向けて (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子, 訳). 京都: ミネルヴァ書房. (Bruner, J. S. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge: Harvard University Press.)
- Carverhill, P. A. (2002). Qualitative research in thanatology. *Death Studies*, 26, 195-207.
- Devers, E., & Robinson, K. M. (2002). The making of a grounded theory: After death communication. *Death Studies*, 26, 241-253.
- ファーフロウ, N. L.・シュナイドマン, E. S. (1969). 孤独な魂の叫び——現代の自殺論 (大原健士郎・清水信, 訳). 東京: 誠信書房. (Farberow, N. L., & Shneidman, E. S. (1961). *The cry for help*. New York: Blakiston Division, McGraw-Hill.)
- ファイフェル, H. (編). (1973). 死の意味するもの (大原健士郎・勝俣暎史・本間修, 訳). 東京: 岩崎学術出版社. (Feifel, H. (Ed.). (1959). *The meaning of death*. New York: Blakiston Division, McGraw-Hill.)
- フリック, U. (2002). 質的研究入門——〈人間の科学〉のための方法論 (小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子, 訳). 東京: 春秋社. (Flick, U. (1995). *Qualitative forschung*. Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- フロイト, S. (1969). 戦争と死に関する時評 (森山公夫, 訳). 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編), 性欲論・症例研究 (フロイト著作集 5) (pp.397-420). 京都: 人文書院. (Freud, S. (1915). *Zeitgemäßes über Tod und Krieg*.)
- フロイト, S. (1970). 悲哀とメランコリー (井村恒郎, 訳). 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編), 自我論・不安本能論 (フロイト著作集 6) (pp.137-149). 京都: 人文書院. (Freud, S. (1917). *Trauer und Melancholie*.)
- フロイト, S. (1970). 快感原則の彼岸 (小此木啓吾, 訳). 井村恒郎・小此木啓吾・懸田克躬・高橋義孝・土居健郎 (編), 自我論・不安本能論 (フロイト著作集 6) (pp.150-194). 京都: 人文書院. (Freud, S. (1920). *Jenseits des Lustprinzips*.)
- Gilbert, K. R. (2002). Taking a narrative approach to grief research: Finding meaning in stories. *Death Studies*, 26, 223-239.
- グレイザー, B. G.・ストラウス, A. L. (1988). 死のアウエアネス

- 理論と看護——死の認識と終末期ケア(木下康仁, 訳). 東京: 医学書院. (Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1965). *Awareness of dying*. New York: Aldine.)
- グレイザー, B. G.・ストラウス, A. L. (1996) データ対話型理論の発見——調査からいかに理論をうみだすか(後藤隆・大出春江・水野節夫, 訳). 東京: 新曜社. (Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967). *The discovery of grounded theory: Strategies for qualitative research*. Chicago: Aldine.)
- ゴラー, G. (1986). 死と悲しみの社会学(宇都宮輝夫, 訳). 東京: ヨルダン社. (Gorer, G. (1965). *Death, grief, and mourning in contemporary Britain*. London: Gresset Press.)
- Hagman, G. (1995). Mourning: A review and reconsideration. *International Journal of Psycho-Analysis*, 76, 909-925.
- Hall, G. S. (1915). Thanatophobia and immortality. *American Journal of Psychology*, 26, 550-613.
- 広瀬寛子・田上美千佳. (2003). 生と死のスピリチュアリティ——がん患者と遺された家族へのかかわりからみえてきたもの. *人間性心理学研究*, 21, 209-219.
- Hjelmeland, H., & Knizek, B. L. (2010). Why we need qualitative research in Suicidology. *Suicide and Life-Threatening Behavior*, 40, 74-80.
- ホルスタイン, J. A.・グブrium, J. F. (2004). アクティヴ・インタビュー——相互行為としての社会調査(山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行, 訳). 東京: せりか書房. (Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (1995). *The active interview*. Thousand Oaks: Sage.)
- ジェイムズ, W. (1969-1970). 宗教的経験の諸相(上・下). 榊田啓三郎(訳). 東京: 岩波書店. (James, W. (1902). *The varieties of religious experience: A study in human nature*. New York: Longmans, Green.)
- Jordan, J. R. (2000). Research that matters: Bridging the gap between research and practice in thanatology. *Death Studies*, 24, 457-467.
- Kastenbaum, R. (1989). Awareness of dying. In R. Kastenbaum & B. Kastenbaum (Eds.), *Encyclopedia of death* (pp.24-27). Phoenix: OryxPress.
- Kastenbaum, R. (2000). *The psychology of death 3rd ed.* London: Free association books.
- Kastenbaum, R. (2001). Thanatology. In G. L. Maddox (Ed. in chief), *The encyclopedia of aging: A comprehensive resource in gerontology and geriatrics 3rd ed.* (pp.1015-1017). New York: Springer.
- カステンバウム, R. (2002). 死ぬ瞬間の心理(井上勝也, 監訳). 新潟: 西村書店. (Kastenbaum, R. (1992). *The psychology of death 2nd ed.* New York: Springer.)
- Kastenbaum, R., & Costa, P. T. (1977). Psychological perspectives on death. *Annual Review of Psychology*, 28, 225-249.
- 勝又陽太郎・松本俊彦・高橋祥友・渡邊直樹・川上憲人・竹島正. (2008). 自殺の背景要因に関する定性的研究——ライフチャートを用いた自殺に至るプロセスに関する予備的検討. *日本社会精神医学会雑誌*, 16, 275-288.
- 川島大輔. (2007). 死生の意味づけと質的研究秋田喜代美・能智正博(監修) 遠藤利彦・坂上裕子(編). はじめての質的研究法——事例から学ぶ(生涯発達編)(pp.317-339). 東京: 東京図書出版.
- 川島大輔. (2008a). 老年期にある浄土真宗僧侶のライフストーリーにみる死の意味づけ. *質的心理学研究*, 7, 157-180.
- 川島大輔. (2008b). 宗教を通じた死生の意味構成——ある女性高齢者のライフストーリーへの事例検討. *人間性心理学研究*, 26, 41-52.
- 川島大輔. (2009). 死の意味づけへの生涯発達心理学的研究——老年期における死と宗教へのナラティブ・アプローチ. 京都大学大学院教育学研究科博士論文. 京都: 京都大学(未公開).
- Klass, D. (2001). The inner representations of the dead child in the psychic and social narratives of bereaved parents. In R. A. Neimeyer (Ed.). *Meaning reconstruction and the experience of loss* (pp.77-94). Washington, DC: American Psychological Association.
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S. L. (Eds.). (1996). *Continuing bonds: New understandings of grief*. Philadelphia: Taylor & Francis.
- 小久保正昭. (2006). 手記分析に基づく末期患者の精神的崩壊を回避する心理的要因. *カウンセリング研究*, 39, 229-240.
- 近藤恵. (2010). 関係発達論から捉える死. 東京: 風間書房.
- 近藤(有田) 恵・家田秀明・近藤富子・本田(井川) 千代美. (2010). 生の質に迫るとは. *質的心理学研究*, 9, 68-87.
- キューブラー・ロス, E. (1998). 死ぬ瞬間——死とその過程について 完全新訳改訂版(鈴木晶, 訳). 東京: 読売新聞社. (Kübler-Ross, E. (1969). *On death and dying*. New York: Macmillan.)
- 鯨岡峻. (2005). エピソード記述入門——実践と質的研究のために. 東京: 東京大学出版会.
- Leichtentritt, R. D., & Rettig, K. D. (1999). Meanings and attitudes toward end-of-life preferences in Israel. *Death Studies*, 23, 323-358.
- Leichtentritt, R. D., & Rettig, K. D. (2002). Family beliefs about end-of-life decisions: An interpersonal perspective. *Death Studies*, 26, 567-594.
- 南博文. (2006). ナラティブ・ターンによって何が「^{ターン}転換」したのか——やまだ論文へのコメント. *心理学評論*, 49, 464-469.
- Nadeau, J. W. (2001). Family construction of meaning. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Meaning reconstruction and the experience of loss* (pp.95-111). Washington, DC: American Psychological Association.

- ナギイ, M. H. (1973). 死に関する子どもの見方. H. ファイフェル (編), 死の意味するもの (大原健士郎・勝俣暎史・本間修, 訳) (pp.80-101). 東京: 岩崎学術出版社. (Nagy, M. H. (1948). The child's theories concerning death. *Journal of Genetic Psychology*, 73, 3-27.)
- Neimeyer, R. A. (1994). Death attitudes in adult life: A closing coda. In R. A. Neimeyer (Ed.), *Death anxiety handbook: Research, instrumentation, and application* (pp.263-277). Washington, DC: Taylor & Francis.
- Neimeyer, R. A. (1997-1998). Death anxiety research: The state of the art. *Omega: Journal of Death and Dying*, 36(2), 97-120.
- Neimeyer, R. A. (2000). Searching for the meaning of meaning: Grief therapy and the process of reconstruction. *Death Studies*, 24, 541-558.
- Neimeyer, R. A. (Ed.). (2001a). *Meaning reconstruction and the experience of loss*. Washington, DC: American Psychological Association.
- Neimeyer, R. A. (2001b). Reauthoring life narratives: Grief therapy as meaning reconstruction. *Israel Journal of Psychiatry and Related Sciences*, 38, 171-183.
- ニーメヤー, R. A. (2006). 〈大切なもの〉を失ったあなたに——喪失をのりこえるガイド (鈴木剛子, 訳). 東京: 春秋社. (Neimeyer, R. A. (2002). *Lessons of loss: A guide of coping*. New York: McGraw-Hill.)
- Neimeyer, R. A., & Anderson, A. (2002). Meaning reconstruction theory. In N. Thompson (Ed.), *Loss and grief: A guide for human services practitioners* (pp.45-64). Basingstoke: Palgrave.
- Neimeyer, R. A., & Hogan, N. S. (2001). Quantitative or qualitative? Measurement issues in the study of grief. In M. S. Stroebe, R. O. Hansson, W. Stroebe, & H. Schut (Eds.), *Handbook of bereavement research: Consequences, coping, and care* (pp. 89-118). Washington, DC: American Psychological Association.
- Neimeyer, R. A., Moser, R. P., & Wittkowski, J. (2003). Assessing attitudes toward dying and death: Psychometric considerations. *Omega: Journal of Death and Dying*, 47, 45-76.
- Neimeyer, R. A., & Van Brunt, D. (1995). Death anxiety. In H. Wass & R. A. Neimeyer (Eds.), *Dying: Facing the facts 3rd ed* (pp.49-88). Washington, DC: Taylor & Francis.
- Neimeyer, R. A., & Werth, J. L., Jr. (2005). The psychology of death. In M. L. Johnson (Ed.), *The Cambridge handbook of age and ageing* (pp.387-393). Cambridge: Cambridge University Press.
- Owens, R. G., & Payne, S. (1999). Qualitative research in the field of death and dying. In M. Murray, & K. Chamberlain (Eds.), *Qualitative health psychology: Theories and methods* (pp.148-163). London: Sage.
- パークス, C. M. (2002). 死別——遺された人たちを支えるために (桑原治雄・三野善央, 訳). 大阪, 吹田: メディカ出版. (Parkes, C. M. (1996). *Bereavement: Studies of grief in adult life 3rd ed*. New York: Routledge.)
- パークス, C. M.・ワイズ, R. (1987). 死別からの回復 (池辺明子, 訳). 東京: 図書出版社. (Parkes, C. M., & Weiss, R. (1983). *Recovery from bereavement*. New York: Basic Book.)
- 戈木クレイグヒル滋子. (1999). 闘いの軌跡——小児がんによる子どもの喪失と母親の成長. 東京: 川島書店.
- Samarel, N. (1995). The dying process. In H. Wass & R. A. Neimeyer (Eds.), *Dying: Facing the facts 3rd ed*. (pp.89-116). Philadelphia: Taylor & Francis.
- 島蘭進. (2008). 死生学とは何か——日本での形成過程を顧みて. 島蘭進・竹内整一 (編), 死生学第1巻——死生学とは何か (pp.9-30). 東京: 東京大学出版会.
- シュナイドマン, E. S. (1980). 死にゆく時——そして残されるもの (白井徳満・白井幸子・本間修, 訳). 東京: 誠信書房. (Shneidman, E. S. (1973). *Deaths of man*. New York: New York Times Book.)
- シュナイドマン, E. S. (1983). 死の声——遺書・刑死者の手記・末期癌患者との対話より (白井徳満・白井幸子, 訳). 東京: 誠信書房. (Shneidman, E. S. (1980). *Voices of death*. New York: Harper & Row.)
- シュナイドマン, E. S. (2005). シュナイドマンの自殺学——自己破壊行動に対する臨床的アプローチ (高橋祥友, 訳). 東京: 金剛出版. (Shneidman, E. S. (1993). *Suicide as psychache: A clinical approach to self-destructive behavior*. Northvale: Jason Aronson.)
- シュナイドマン, E. S. (2005). アーサーはなぜ自殺したのか (高橋祥友, 訳). 東京: 誠信書房. (Shneidman, E. S. (2004). *Autopsy of a suicidal mind*. New York: Oxford University Press.)
- 荘島幸子・川島大輔・川野健治. (2010). 死・自殺のイメージスキーマ. 精神保健研究, 56, 65-79.
- 庄村雅子. (2008). 死にゆくがん患者と家族員との相互作用に関する研究. 日本がん看護学会誌, 22, 65-76.
- Silverman, P. R. (2000). Research, clinical practice, and the human experience: Putting the pieces together. *Death Studies*, 24, 469-478.
- Silverman, P. R., & Klass, D. (1996). Introduction: What's the problem?. In D. Klass, P. R. Silverman, & S. L. Nickman (Eds.), *Continuing bonds: New understanding of grief* (pp.3-27). Philadelphia: Taylor & Francis.
- Stroebe, M. S., Gergen, M. M., Gergen, K. J., & Stroebe, W. (1992). Broken hearts or broken bonds: Love and death in historical perspective. *American Psychologist*, 47, 1205-1212.
- Stroebe, M., Stroebe, W., & Schut, H. (2003). Bereavement

- research: Methodological issues and ethical concerns. *Palliative Medicine*, 17, 235-240.
- 鷹田佳典. (2003). 死別と自己物語の再構築. 年報社会学論集, 16, 175-186.
- 鷹田佳典. (2006). 故人との絆はいかにして継続されるのか. 年報社会学論集, 19, 177-188.
- Tedeschi, R. G., Park, C. L., & Calhoun, L. G. (Eds.). (1998). *Posttraumatic growth: Positive changes in the aftermath of crisis*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Thorson, J. A. (1996). Qualitative thanatology. *Mortality*, 1, 177-190.
- Walter, T. (1996). A new model of grief: Bereavement and biography. *Mortality*, 1, 7-25.
- 渡邊照美・岡本祐子. (2003). ガンに直面した患者がたどる受容プロセスに関する研究——ケアの視点から. 家族心理学研究, 17, 83-96.
- 渡邊照美・岡本祐子. (2006). 身近な他者との死別を通じた人格的発達——がんで近親者を亡くされた方への面接調査から. 質的心理学研究, 5, 99-120.
- ウィリッグ, C. (2003). 心理学のための質的研究法入門——創造的な探求に向けて (上淵寿・大家まゆみ・小松孝至, 訳). 東京: 培風館. (Willig, C. (2001). *Introducing qualitative research in psychology: Adventures in theory and method*. Buckingham, Philadelphia: Open University Press.)
- Wright, K., & Flemons, D. (2002). Dying to know: Qualitative research with terminally ill persons and their families. *Death Studies*, 26, 255-271.
- やまだようこ. (2000a). 喪失と生成のライフストーリー. やまだようこ (編著), 人生を物語る——生成のライフストーリー (pp.77-108). 京都: ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2000b). 人生を物語ることの意味——ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編著), 人生を物語る——生成のライフストーリー (pp.1-38). 京都: ミネルヴァ書房.
- やまだようこ. (2000c). 死にゆく過程と人生の物語. C. ベッカー (編著), 生と死のケアを考える (pp.45-65). 京都: 法蔵館.
- やまだようこ. (2006a). 喪失といのちのライフストーリー. 日本保健医療行動科学会年報, 21, 34-48.
- やまだようこ. (2006b). 質的心理学とナラティブ研究の基礎概念——ナラティブ・ターンと物語的自己. 心理学評論, 49, 436-463.
- Yang, S. C., & Chen, S. (2002). A phenomenographic approach to the meaning of death: A Chinese perspective. *Death Studies*, 26, 143-175.
- 良原誠崇. (2009). 自死遺族サポート・グループ運営者の喪失をめぐる物語的構成. 心理臨床学研究, 26, 710-721.